

『中日大辞典』を脱稿 鈴木愛大教授ら

三十四年がかりの労作 改革文字ふくめ十五万語

【豊橋】愛知大学鈴木沢郎教授（六六）らの手で、進められてきた「中日大辞典」が、このほど三十四年ぶりに脱稿、出版の目途もついて、今月末までには一万部の印刷にかかることになった。この辞典は、約二千三百ページ。特色は中共政権後の文字改革でできた漢字の「簡化字」二千三百八十字がほとんどは入り、約十五万語がおさめられており、本格的な現代中国語辞典であることだ。

鈴木教授がこの辞典の編さんを手がけたのは、上海の私立専門学校東亜同文書院（昭和十三年に大学に昇格）時代。ちょうど昭和六年の満州事変の起ったころだった。当時も中日辞典らしいものはあるにはあったが、どれも不満を感じた鈴木教授が、当時の同僚の神戸大坂本一郎教授、元東北大学教授の故野崎駿平氏らと話し合い、本格的な中日辞典を目ざし、カードの作成にとりかかった。

こうして鈴木教授を中心にした同書院の編集グループで、脱稿寸前までこぎつけたが終戦となり、約十四万枚の資料カードは中国に接収され、鈴木教授らも内地に引揚げて来た。

昭和二十九年五月、中国側の好意と作家郭沫若氏らとのりはからいで、カードはそっくり日本に戻ったが、革命後の新中国では、ことばも大きな変化があり、返ってきたカードは、もうほとんど使いものにならなかった。たとえば「糸」と「三転」の「ボーイ」が年間に二度も字体を変えた。最初は、「階級的」な言葉も生れたりしていた。

「服務員」に変わっていたなど。多くの「階級的」な言葉も生れたりしていた。そこで旧同文書院時代の教授の多い愛大で、鈴木教授を中心に一から出直して、新しい完全な中日大辞典を編集することになった。鈴木教授を編集委員長に、鈴木教授の同文書院時代からの愛弟子内山雅夫教授（四八）、それに元同文書院講師で現外務省研究所講師欧陽可亮さんの夫人張祿沢女士（四五）の三人を推進者に、およそ十人の手でこの事業がはじめられた。

この十年間の事業には、人件費もふくめ二千余万円かかった。文部省からの助成金もふくめ、そのうち約五百万円が民間など外部からの援助だった。

二十七日、訪中地方自治友好団の一員として中国を訪れる河合豊橋市長も、本間喜一前学長から「このうれしいニュースを郭沫若氏らにお世話になった人たちにぜひ伝えて下さい」と頼まれており、同市長も何よりのおみやげだとその日を楽しみしている。

鈴木沢郎教授の話 わたしたちは学究で金の心配その他は一切せず、ひたすら原稿の作

成に専念しましたが、大学全体の協力があったればこそここまでこぎつけられたので
す。

吉川幸次郎京大教授の話 戦後も中国語辞典は数多く発行されているが、東亜同文書院
の優秀なスタッフが長年月を費やして編さんしただけに特色ある辞典だと期待して
いる。

〔注〕朝日新聞 昭和四十年四月二二日所載。

世に問う「華日辞典」

来年六月までに出版のメド

十年間の労苦が実る 喜びの愛大、鈴木教授ら

愛知大学華日辞典編さん所（豊橋市町畑町・鈴木辰郎所長）は、このほど華日辞典の出版メドがついたので、近く印刷にかかり来年六月ごろを目標に発刊できるような準備を進める。これまでには出版資金、発行所などの関係で出版が遅れていたが、ようやく同編さん所十年間の努力が実ると共に、りっぱな業績を世に問うことになった。

同辞典の出版元は同編さん所とし、発行所は東京千代田区神田神保町、株式会社大安に決まった。印刷所はいま東京の図書出版会社と契約中であるが、一週間以内には契約完了の見通し。

同所では六月から原稿を印刷会社に送り、さっそく印刷に入り、来年六月には一般に発売されることになっている。初版は一万部で定価は三千五百円を予定している。

辞典はB六版で二千ページ以上表紙はグリーン色のビニールで表装する。収語は現代語から文献にある清時代の古いことば、それに方言など約十三万語にのぼる。これをABCの順序にし、発音は北京語を中心に使っており、注訳文や例文なども多く記されている。

とくに中国の文字改革で「簡化字」（略字）ができたので、辞典にも簡化字を使うことになっているほか、付録に文字年表、中国の歴史、日本語の索引も入れられる。いずれにしても収語の数、簡化字の採用など内容的にこれまでにない立派なもので、これだけの辞典は日本では初めての刊行といわれている。

印刷費用は千六百万円。これは大学から五百万円、日通社長の辞典前納金五百万円、残り六百万円は一般注文の予約金でまかなうことになっている。辞典の出版が遅れていたのはこうした資金のメドがたたないためで、このほどやっとメドがつき、出版のはこびとなったわけである。

同編さんは昭和三十年四月から鈴木辰郎同大教授が中心となり、十年間の歳月をかけている。しかし実際にはそれ以前の昭和六年、鈴木教授が上海の東亜同文書院教授だったころ同僚と辞典づくりを手がけたのが始まりで資料カードが十四万枚できたところで終戦となり、中共側に全部接収された。その後中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて愛大に返還された。しかし中国の文字改革で「ボーイ」ということばが「服務員」と変ったり、簡化字ができたりしてカードは全然役立たなくなっていたので、改めて改訂するという苦労を重ね、このたびの発刊にこぎつけたもの

〔注〕 東海日日新聞 昭和四十年四月二日所載。

最新の資料で 13 万語

愛大鈴木教授ら 苦心の「中日辞典」出版

【豊橋】豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん（纂）処Ⅱ主任・鈴木一郎教授Ⅱでこのほど完成した「中日辞典」がいよいよ出版されることになった。今週中に出版元の株式会社大安発売所Ⅱ東京都神田神保町、小林実弥社長Ⅱとの間に正式に調印されしだい、印刷に取りかかり、早ければ来春には出版するという。

この「中日辞典」は収録したことはアルファベット順に「A」から「Z」まで十三万語で、現在出版されている辞典で七万語のもの二倍以上といわれる。現在の華日辞典に比べると、一語ずつ語源、語のニュアンス、用語例、方言、略語、反対語、同意語から参照語までしるされている。とくに中共政権の文字改革によって五回にわたる漢字二千三百八十文字の略字化と四回にわたる発音の変化がはいっており、わが国初めての本格的辞典。

出版本は縦十八行、横十三行で二千六、一万部を刷る。印刷元は図書出版社沼津工場の予定。

この辞典編纂は昭和三十年から本格的に始まったが、戦前、鈴木教授が上海の東亜同文書院教授だったころ「知りたいことがでていない」と不満を持ち、神戸外大の坂本一郎教授、元東北大の故野崎駿平教授らとすでに辞典づくりを手がけていた。ところが終戦と同時に資料を中共側に接収された。それが中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて返され、中国語に強い愛知大学で十年の歳月をかけ完成した。

編集には鈴木教授はじめ同大学の中国語担当、その他関係の助教授、講師ら九人で始め、その中には中国人女性の張祿沢講師もいる。中国にも辞典の決定版がまだ作られていない現状だから、参考文献なども少なく、処員らを悩ましたという。

出版の費用千五百万円のうち、同大学で五百万円を負担し、残りは予約注文や本間喜一前学長らを中心になって篤志家から寄付金を集めていくという。

処員の苦勞が実る

鈴木教授の話

やっと出版の見通しがつき、処員の苦勞が実ってうれしい。

本間前学長の話 大口の寄付者との話し合いもほとんどついた。出版したら、中共の好意もあり、約千部は贈りたい。

〔注〕中日新聞 昭和四十年四月二二日所載。

日の目みる “大中国語辞典”

喜びの愛大・鈴木教授ら

十年の努力みのる 日通本社がかけの助力

豊橋市町畑町の愛知大学華日辞典編さん所（鈴木沢郎所長）で十年間にわたって中国語カードをつくってきた努力がやっと実り、このほど二千^六、十三万語収録の大中国語辞典の刊行が本決まりとなった。鈴木所長以下、五人の編さん委員の索引カードを整理する手つきも軽い。

この日本一の大辞典を出版するには約三千万円の費用がかかるため、早くから索引カードまでできていたのに長い間、辞典実現の運びとならなかつた、だが、ことし三月初め本間喜一前愛大理事長が日本通運東京本社の社員教養大学開設に骨折ったことから、同社が二千冊同辞典の予約注文をして、二百五十万円を前金として支払ったことが辞典刊行に明るいきざしを与えた。

この金と大学側の出版費合わせて五百万円で東京・図書出版社に印刷を依頼、今週中に印刷契約をとりかわすところまで来た。同時に発売は東京千代田区神保町の中国書籍専門の「大安」が引き受けることになった。

印刷にかかるのがことし六月ごろで、発刊は来年六月になる見込みという。

昭和八年、同大の前身、上海の東亜同文書院時代に鈴木さんらがこれまでの中国語辞典に不満を感じて中国語カードの編集、整理を始めたのがこの辞典ができる最初のきっかけ。当時のカードのほとんどは戦後中共に没収されたものの、日中友好協会の好意で再び愛大の鈴木さんのところへ帰ってきた。

昭和三十年四月、これらのカードをもとに華日辞典編さん所を開設、きょうまでずっと整理にあたってきた。約三十年越しに実現した辞典というわけ。

それだけに古代中国語や現代中国語の国語文「白話文」もふんだんにのっており、多くの例文が織り込まれている。六十四年八月中共の文字改革によって生まれた“簡化字”二千二百三十八字も新しく活字をつくらせて、収録するなど、完ぺきな大辞典になるといい、関係者から発刊が期待されている。

鈴木教授の話 長年の苦勞がやっと実って、ホツとしています。一冊二千五百円程度で一万冊出版の予定です。現在日本で出版されている中国語辞典は七万語収録が最高といえますから、この大辞典ができれば、これまでの辞典で物足らなかつた人にも十分満足してもらえるでしょう。

〔注〕毎日新聞 昭和四十年四月二二日所載。

華日辞典の編纂終わる

華日辞典編纂処による華日辞典の編集が、このほど完成し、出版を待っただけとなった。華日辞典編纂処は鈴木沢教授を委員長とし、内山雅夫教授・張祿沢女史など約十名により構成されており、坂本一郎神戸大教授・故野崎駿平元東北大教授らの協力によって完成された。

この事業は本学の前身東亜同文書院の頃から始められ、戦後一時中断されていたのが、昭和二十九年より再び始められたものである。この間中国に文字改革があり漢字の「簡化字」が行なわれた。完成された辞典の中には簡化された文字約二千三百八十字が含まれ語数十五万余が収められ、頁数二千三百という立派な辞書である。このように本格的な中国語の辞典は他に見られないのでこの辞典は各界から注目されている。

なお、この辞典の完成に対して中国からの若干の援助もあり、この辞典を日中友好協会を通じて、約五百部中国へ寄贈される予定である。

〔注〕愛知大学新聞 昭和四十年五月二十日所載。

華日辭典將刊行

愛知大學教授鈴木擇郎編纂的華日大辭典最近已經脫稿附印，將在明年六月完成。

這部華日辭典是鈴木擇郎一九三三年在上海同文書院執教時，便開始搜集資料，進行編纂華日辭典，在日本投降後，這些資料便留在中國。新中國成立後，鈴木擇郎通過日中友好協會的內山完造先生，向中國方面表示願意利用這些資料，繼續進行編纂工作，一九五五年，中國方面以中國人民贈送給日本人民方式，把這批資料贈送給愛知大學。鈴木擇郎教授由一九五五年四月在愛知大學開始了編纂工作，同時由於內山正夫、遠藤透造，宗內鴻和歐陽張祿澤（歐陽可亮的夫人）的協助，編纂工作有了迅速進展。

這部華日辭典已在今年夏天開始附印，一年之內可能印製完了，兩千万元的印製費用已經辦妥，預計明年六月可以完成。

〔注〕大地報——大陸系華僑新聞——一九六五年二月一五日所載。

『中日大辞典』完成近づく

十三万語を収録 愛大鈴木教授 苦節十年実る

【学橋】豊橋市町畑町、愛知大学華日辞典編さん（纂）処Ⅱ主任・鈴木沢郎教授Ⅱが十年の歳月をかけて十三万語をそろえた、わが国初の本格的な中国語辞典「中日大辞典」はいよいよ完成に近づき、新年早々から出版元が予約注文を始めることになった。

この中日大辞典は、戦前鈴木教授が上海の東亜同文書院にいたころ神戸外大の坂本一郎教授、元東北大の故野崎駿平教授らと手がけていたもので、終戦と同時に資料を中共側に接收され、中断のかたちになっていた。ところが二十九年暮れ、中共の郭沫若科学院院長らの好意で日中友好協会を通じて日本に返され、愛知大学の鈴木教授の手に戻された。

本格的に編集が始まったのは昭和三十年からで、鈴木教授を中心に同大学の中国語担当、その他の関係の助教授、講師ら九人が編集に参加した。中国にもまだ辞典の決定版は完成していないといわれ、参考文献も少ないうえ、中共政権になって数回にわたる漢字略字化と発音の変化があつて処員らは苦労したという。

辞典はアルファベット順にAからZまで十三万語が収録され、一語一語に語源、ニュアンス、用語例、方言、略語、反対語、同意語、参考語などが記されている。

今春、東京都千代田区神田神保町、株式会社大安と出版契約がまとまり、図書印刷株式会社印刷元になって静岡県の原町工場で植字が始まった。現在同編さん処へは校正刷りが工場から順次届き、鈴木教授をはじめ内山雅夫教授ら四人は、大きな拡大鏡を通して目を充血させながら校正に励んでいる。校正は五校まで行われるはずで、二校後は東北大の志村良治助教授ら数人にも依頼して完全なものにする。

予約注文は出版元が年内に内容見本二万枚をつくり、各大学、研究室、図書館などへ送り正月すぎから予約受け付けを始める。

〔注〕朝日新聞 昭和四十年十二月十八日所載。

愛知大学 ― 中国への情熱

永井道雄

(前略)

しかし、教育よりも研究の面でとくに注目する必要があるのは、東亜同文書院時代から続けられている華日辞典の編纂である。この事業がはじめられたのは、ちょうど三〇年前、昭和八年のことであるが、一四万枚のカードができたところで、同文書院大学は解散し、カードは昭和二〇年中国側に接收された。ところが、越えて昭和二九年の秋、日中の交渉がしだいに復活してきたとき十四万枚のカードは、ほとんど原型のまま、中国政府から日本人民に寄贈された。

しかし、この間には、歴史が変わっただけでなく、文字も、言葉の意味もいちじるしく変化している。大学は昭和三〇年から、ふたたび編纂事業にとりかかり、昭和八年以来、この仕事にたずさわってきた鈴木沢郎教授を中心に、根気よく努力をつづけ、ようやく三八年中に完結した。

戦火の時期をはさんで三〇年、この大事業が進行したことは何を物語るのか。中国語について素人であるわたしに判断はむずかしいが、日中間にあれば深い関係がありながら、これまでの辞典は比較的初歩的なものにとどまり、包括的な基本的辞典が、ようやく、この段階にできあがるという事実には深い問題がふくまれているように感じられる。

それにしても、最近、東京外大教授・鐘ヶ江信光氏の『華日辞典』が刊行され、また東大名誉教授・倉石武四郎氏の辞典の刊行も予定されている。こうした最近の中国研究者のエネルギーにこんごの一つの方向がひそんでいるようにも思われる。

(後略)

〔注〕「朝日ジャーナル 大学の庭」一九六三年五月十二日号所載。永井道雄「愛知大学・中国への情熱」より抜粋。

華日辞典刊行のことについて

愛知大学鈴木択郎教授（十五期）説明

予て上海同文書院において昭和八年頃から辞書作成のため資料作成中のところ終戦に際し、中国政府に接收されてしまいました。これを返却して欲しい旨中国政府に申請していたところ、昭和三十年に日本人に寄贈するという形で返つて来た。これを三十年四月頃から愛知大学において継続編纂することになり、鈴木択郎（十五期）内山正夫（三十五期）遠藤秀造（十九期）宗内鴻（十五期）張先生（欧陽可亮先生の夫人）等の諸氏の努力により刊行の段階まで至つた次第である。刊行には莫大な資金を要しますが、偶々よいスポンサーが出て来まして刊行費の三分の一を寄付して下さることになり、印刷には約一年を要しますが、明年六月頃までには出来あがる予定となっております。同華日辞書の特徴としては、収録語数が約十三万語で普通の従来辞書の五万余語の倍以上であり、新国の語句は勿論、古代文を読むための語句も採り入れています。

右のような説明があり、発売の際は協力してほしい旨の挨拶あり。以上で総会々場における諸事項を終り、懇親会場に席を遷して、懇親会食す。

〔注〕「滬友」十九号（一九六六年十一月）所載。

「中日大辞典」について

十六期 大 矢 信 彦

「滬友」第二十四号所載、石川会長の巻頭言「侵略的語学」を読んで、僕も若干の感あるを免れないが、しかし僕はかかる議論に反発したり、かかずらう興味を持ち合わせない。僕も同文書院に入学して以来、永年の支那生活の結果、支那語、支那文は僕のからだに沁み入って、今さら忘れ去り、洗い落とすことはできない間柄で、それをとやかく言われたって、何とも致し方ないことである。ただ僕は喋る支那語にはいかにも弱く、いろいろ欠点を持つていることもよく承知している。かかる弱点、欠点を指摘して、「だから同文書院の支那語はつまらぬ」と言われたら、僕としてはまことに一言もなく、母校および師兄に對してまことに申訳なく、只管恐縮せざるを得ない。しかし一方では、我等の同学諸君によって「中日大辞典」が完成されたことによって「同文書院の支那語だってバカにしたものでないぞ」と氣を吐いているように思えて、意を強くさせてくれているのである。

* * * * *

今年春間、僕神田へ行ったついでに、神保町の「大安」に寄ってみた。僕は先年この「大安」が複製した中国共産党初期の機関紙「嚮導」の合本五冊を買ったことがあるので、又何か目ぼしきものがなと思いつつ立ち寄ったところ、忽ち愛知大学編纂の「中日大辞典」なるものが目についた。開巻劈頭「編者のことば」を鈴木沢郎氏（十五期）が書いているので、有無を言わず、真ちに一本を購入して帰った。

* * * * *

僕は同文書院へ入学するときに買った「岡本：支那声音字彙」以外に、支那語の字書というものは持ち合わせなかった。書院時代に、当時日本で出版された何とかいう支那語の字書を見たことがあるがつまらぬものと思った。僕は支那語にはまことに弱いが、読み書きにはさまで不自由しないまま、支那語の字書には比較的関心が薄く「商務院書館：辞源」一本槍で押し通して来た。しかし「辞源」は口語、俗語にはテンデ役立たぬので、僕も時に内心然るべき支那語の字書がないものかと思わぬでもなかった。戦時中、上海で国語辞典が出版されていると聞いたが、当時北京、天津には上海の書物があまり来ぬようになっていたので、買わずじまいだった。

* * * * *

ところが戦後大分以前のことだが、同文書院の支那語の教師諸君が支那語字書編纂のため作っておいた膨大な資料カードが中共当局の好意によって日本に返還され、それを基礎に愛知大学で旧同人諸君が支那語字書を編纂することになったと新聞で知って、窃かにその完成を心待ちしていたのだった。

さてその「中日大辞典」を僕如きが兎や角あげつらうのは烏滸がましい沙汰だが、一本を買って家に持ち帰るや、早速薄暮の縁側で繰り展げてべつ見したところ、その編纂ぶり

のただ事にあらざることを感得して驚嘆を禁じ得なかつた。先づその精細、緻密、懇篤、鄭重なことに驚いた。久しく会わぬが、鈴木氏の人柄が彷彿躍如として浮んで来る思いがした。僕はまたこの「中日大辞典」をあまり使っていないから「中日大辞典」の真価のほどを具体的に紹介することはできないが、この「大辞典」があれば何かのときにも困らぬだろうと、安心感を与えてくれている。

* * * * *

この「中日大辞典」を繰っていてちよつと違和感を持たされるのは、中共式漢字略字と中共式ローマ字標音である。僕はむかし国共分裂後の中共のガリ版文書を読んで来たことがあるから、略字には頗る慣れている。当時共産党が使っていた漢字略字と今の中共の略字とは必ずしも同一でないし、今は数も多くなっているが、略字のモテ方の幾つかをかめば、大よその見当をつけて不自由なく読める。読めぬような略字だったら、略字の意味はない。なおこの「大辞典」は略字のみではなく、繁体というか、本字でも引けるから、旧弊人にも使用できる。

漢字略字よりも、僕にとつて苦手は漢字の中共式ローマ字標音である。永年トマス・ウエード式で育つて来た僕にとつてあれは困る。なるほど所謂有気、無気と云うか、清濁音の区別をつけたら、その他より正確な標音ができる長所はあるが、老碌この歳になつては、せいぜい当て推量で読むことが精一杯で、あれを完全に覚えると云われても、もうその気力もなければ脳力もない。そのためこの「大辞典」をローマ字で引くときは、相当面倒を感じることが少くない。そう云う点でも僕の如きは甚だ時代遅れだし、支那語の字書をさまで必要とせぬ僕にこの「中日大辞典」を批評する資格がないことは前にも述べたとおりだが、その僕でもこれは「大した字引きだ」と断言し、推奨して憚らぬ自信があることを申し添えて置く。

* * * * *

尚余談に亘るが、今から七、八年も前のこと―当時東大の教授で、国語審議会委員倉石武四郎氏の中共からの帰來談があるからと日比谷の新聞協会から案内を受けて、聞きに行つたことがある。彼は国語審議会で漢字制限と略字作りの首謀者と聞いていたが、その時の話では、中共では略字とローマ字標記が盛行していて、ローマ字標記で漢字の音を全国的に統一したのみならず、漢字の代りにローマ字が相当広汎に行われているとのことで、それにつけても、日本でも漢字をもつと制限し、略字に置き換えたり、ローマ字或は仮名文字をもつと使うようにしたらといった論旨だったように記憶する。老頭兄の僕には、今更そんな改革には興味なく、ただ、中共のローマ字とはどんなものかについて知りたかったが、具体的な説明はなかった。僕は「漢字の代りにローマ字を用いるようになれば『音』は全国的に統一されようが、『声』はどうして現わすのか」と質問した。すると氏は「支那人は『声』は自然に体得しているから特に声を表明しなくとも良い」という返事だった。僕は「そんなバカなことが…」とその返答には納得いかず、今日に至っていたが、こんど「中日大辞典」を見るに及んで、中共式ローマ字標音には『声』を現わす記号が

やんとついているのを知って納得した。

* * * * *
 むかし僕が上海で鈴木枳郎氏のところへ厄介になつていたとき、彼のところへ「嚮導」が来ていたのを、僕も読んだことがあった。僕は北へ移つたので一時杜絶えたが、その後バックナムバーから揃えて、「嚮導」を翻訳することが永年続いた。日本へ引揚げてからは「嚮導」が手許にないので、何とか手に入らぬものかと思つていたところ、先年その原本と寸分違わぬ複写本が「大安」によつて刊行されたことを知つて、早速買い求めた。そしてこんどはその大安が「中日大辞典」を発行したのである。鈴木氏―嚮導―中日大辞典―大安と並べて来ると、僕は一種の因縁を感じさせられる。

* * * * *
 過日僕は同期生の会合においてこの「中日大辞典」について一言推奨の語を述べたところ、誰かの話ではこの「中日大辞典」編纂をめぐつて、滬友同窓会と愛知大学との間に何かいざこざがあつて、未だその解決を聞いていないとのことだった。僕は左様なことは頓と知らず、今更に驚き入つた次第だが、もし果して何かいざこざがあつたのなら、その真相を「滬友」誌上でも明かしてもらいたい。或は既に何事か発表されているが、それを僕が読んでおらずに知らぬのかも知れないが…。

* * * * *
 しかし何事があつたにせよ、この「中日大辞典」が完成出版されたのは慶賀すべきことだ。そしてこの「中日大辞典」編纂に献身された同人諸君の努力と労苦に感謝し、その功績を讃えようではないか。

* * * * *
 現今世間では日通事件に驚き、福島前日通社長に非難の声を浴びせているが、「中日大辞典」編者のことばによると、福島社長は昨年四月、多数予約して、この辞典の出版を助けてくれたそうである。日通社長と「中日大辞典」とは奇妙且つ意外な取り合わせのようだが、その経緯の仔細を知らぬ僕がとやかく申すことはない。しかのみならず、編者のことばを読んで知らなかったとは申せ、僕はその困難な出版に対して何等助力しなかったことに忸怩たるものがある。この「中日大辞典」は今後僕の案頭にあつて、恐らく僕の終生の伴侶の一つとなるであろうが、僕のこの慚愧の念と同時に、福島という日通社長がこの出版を助けたことが永く僕の記憶に残るであろう。

〔注〕滬友 二五号（一九六九年二月）所載。

『中日大辞典』の編纂と刊行

昭和四十三年二月、愛知大学から刊行された『中日大辞典』は日中両国の学者、研究者に多大な感銘を与えた大著作である。その基盤となった原稿カードは書院の中国語関係教授（鈴木・熊野・野崎・坂本・影山・岩尾・内山・木田・金丸・尾坂各教授・講師・助手のほか中国人講師八名）が多年にわたり集積整理したもので粗資料カード十四万枚、語数八万語に及んだ。戦後奇しき運命を経て、この原稿が日本側へ無事返還されたのを契機に、発刊にまで漕ぎつけたものである。この間の事情について編纂委員長となった鈴木沢郎教授は、その遺稿の中で次のように述懐している。

「私の学生時代、中国語学習でお世話になった書物は、『華語萃編初集』、『官話指南』、『談論新編』などの教科書と岡本正文氏の『支那声音字集』以外には何もなかった。ジャイルスの『中国語辞書』の話は聞いていたが、われわれの目には触れなかった。

その後、母校に奉職した私は大胆にも中国語辞典の編纂を提議して同僚諸君と書院当局の賛成をえ、「支那研究部」の事業として辞典の編纂にとりかかったのが、昭和八年のことであった。

敗戦となり、同文書院大学のすべての財産が中国政府側に没収され、中国辞典カードも同じ運命になったが、この原稿カードを接収委員鄭振鐸氏（著名な中国文学者）に引きわたすとき―将来もし事情が許すようになったら、われわれに辞典を完成させてもらいたい―旨を要望しておいた。

戦後約十年、愛知大学学長本間喜一氏（元書院学長）の熱心な奨めがあり、同氏名義で日中友好協会理事長内山完造氏に依頼し、中国科学院院長郭沫若氏を通じて中華人民共和国政府へ原稿カードの返還を願い出た。書院諸教授によって集められたカードは幸いにして完全に保管されており、「中日文化交流のため改めて日本人民に贈与する」との主旨で日中友好協会をとおして返還されてきた。

さて、この編纂事業は、どれだけの人員で何年かかるか、編纂費や印刷費はどれほどかかるのか、まるで見当もつかなかった。また大陸では文字改革が行われるなど、辞典の完成期は推定すらも困難になった。

愛知大学は創立後日なお浅く、苦しい大学財政から編纂費や専従者の人件費などを捻出することはまことに大変なことであったが、こうした苦境を救ってくれたのは朝日新聞・毎日新聞・中日新聞・地元の実業家石原氏など各方面からの支持・応援であった。編纂業務の進行には前述のような中国の変革があり、それを知る資料の入手に困難があり、問題解決に時間を要することが多く、簡化漢字の母型二千余の制作も必要になるなど、ついに十三年間を要して脱稿にこぎつけた。

さて印刷に回す段になると、中国文に慣れた印刷所は少なく、中国語の簡化漢字を活字にするにも多くの困難があり、旧繁体字、異体字、標音、声調符号など、大変な面倒

があつた」(鈴木択郎遺稿より)。

しかし出版社大安(現在、燎原書店・社長小林実弥(註2))の献身的な協力で、昭和四十二年(一九六七)ようやく出版することができた。五十六年六月現在、この大辞典は第七刷を出し、通計六万部に及んでいる。

〔注〕『東亜同文書院大学史』(一九八二年五月 滬友会編) 所載。

(前略)

主要得意先―全国各大学と愛知大学

なかでも一際目立った存在は愛知大学であろう。戦時中いわゆる外地にあった上海の東亜同文書院大学・京城帝国大学・台北帝国大学・満州建国大学などは、敗戦の結果として当然維持することができなくなつた。終戦時に同文書院の学長であつた本間喜一氏の唱導で豊橋市に創設され、上記各大学の教師・学生を優先的に吸収することとなつたのである。当然のことながら東亜同文書院時代在任中の教職員と在学中の学生が多数を占めている。そのキャンパスで他大学では見られない独特の存在は、ほかならぬ中日大辞典編纂処である。東亜同文書院の比較的初期の卒業生であり、同校の専任中国語教師でもあつた鈴木擇郎氏が、愛知大学でも引き続き中国語主任教授であり、辞典編纂事業の主導者でもあつた。鈴木教授とほぼ同じ時代に同文書院を卒業し、戦後日本国内各大学の教授を歴任した人々の中には、熊野正平（一橋大学）・野崎駿平（東北大学）・小竹文夫（東京教育大学）・坂本一郎（神戸外国語大学）各氏など、新しい日中関係の中で学術・文化交流の架け橋として特異な存在であつたことは、大安の事業発展に大きな励ましともなつた。

(中略)

歴史的意義をもつ『中日大辞典』ついに刊行

この年なんと言つても最大の出版は、当社出版史上内外に注目された愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』である。当社があえて微力を省みることなく、刊行を引き受けたいことについては、重視すべき歴史的経緯があつた。

一九四五年八月十五日の敗戦によつて、当時上海市徐家滙にあつた東亜同文書院大学も廃校の憂目を見ることとなつた。同大学は当初日中両国の民間経済・文化交流の人材を養成する専門学校として、東亜同文会（近衛篤磨会長）の理念に基づく大事業として発足し、敗戦当時四十五年の歴史を有していた。しかし一方歴史的事情により上海では最高学府とされた交通大学のキャンパスを占有していたことから、上海市政府より直ちに返還するよう要求されたのも当然であつた。校舎・関連諸施設すべて接收の際、所蔵図書・文献類も貴重な文化財として、接收委員の一員である鄭振鐸氏（作家・文学史家・蔵書家として内外に有名）立ち会いの上、目録と照合して直接引き渡された。その際大華語部諸教授が永年努力作製した龐大な華語辞典カードもすべて没収されたのである。

しかし間もなく曙光が見えてきた。日中友好協会の成立（一九五〇年）とともにその理事長に就任した内山完造氏（魯迅と親交のあつた内山書店社長）を通して、「改めて日本人に贈る」とこの龐大な辞典カードが中国から日本に返還され、愛知大学に帰属することとなつたのである。

愛知大学は一九四六年十一月十五日、豊橋市に創立された。東亜同文書院大学の学長であった本間喜一氏が中心となり、敗戦当時外地の教職員・在学生をできるだけ吸収することを念頭に誕生した。戦後各地の大学に分散していた旧東亜同文書院大学華語部の教師達、鈴木擇郎（愛知大学・熊野正平（一橋大学）・野崎駿平（東北大学）・坂本一郎（神戸大学）各教授（何れも東亜同文書院卒）が協議の末、愛知大学に中日大辞典編纂処を新設し、ここを根拠として一時頓挫せざるを得なかった作業を継続することになった。本間新学長の陣頭指揮で編纂体制はようやく確立したものの、これを支える隘路は資金面にあった。朝日・毎日・NHKなどマスコミ関係や対中貿易商社などの寄金援助を得ながら、一九五六年に鈴木教授から初めて出版刊行に関する依頼を受けた。そこで当社としては戦後日中両国の友好関係を回復し、そのための架け橋となることを改めて決意し、この大事業を快く引き受けた次第である。紆余曲折を経ながら再三出版予定も延期せざるを得ず、ようやく一九六八年一月末に刊行されたが、それだけに需要者の期待も大きかった。その内容は簡体字・異体字・繁体字を含む一万一九五字を収録、漢語拼音字母（新ローマ字）による字音のアルファベット順に排列した十三万余の語彙は、まさに最新・最大・最高の内容を誇るものとなった。その一部（二〇〇冊）は中日友好協会を経て中国の教育・研究機関にも贈呈された。

（後略）

〔注〕「大安社史」（一九九八年五月）所載。

中日大辞典の出版

本間―中日大辞典の時にはお世話になった。あれを出す時郭沫若さんに手紙を出して、カードを返してくれと言ったら、返してきたんだ。それで中日文化協会（日中友好協会の誤り）でも、誰に頼んでこの仕事をやるうか、ということになったが誰も引きうけ手がなく、愛大としてはこちらへ返してくれと言った手前もある。これは随分と金のかかる仕事だけど、調査費も毎年二〇〇万かかる、文部省から一〇〇万、朝日新聞やその他から金をもらった。新しい活字なんかのこともあった。いよいよ出そうという段階で、平凡社のオヤジが調査費まで出せないが、出版時には相談に来说っておだったので、平凡社へ出かけてみたところ、平凡社のオヤジは死んでいる。昔こうだったと話をしたところ、今中国語をやる学生はどれくらい居るだろうと、こんなことを言い出した。売れないものは引きうけないといった頭だから、とてもだめだった。それから安部能成氏の紹介で岩波書店へも行った。岩波も小さい薄い中国語の辞書を出していたので、別的大型辞典を出すことに難色を示した。それでは自己出版しなくてはならんとなり（今「燎原書店」をやっている小林実弥君（42）期が来てくれた。

それで毎日新聞の田中さんの所へも行き、出版費千部分を引きうけてもらった。その他に朝日が千部、中日、日通などが千部、特に毎日是中国へ千部寄付してもらったので、二重に有意義になった。それで一千万近くの金が集まった、学校でも自費出版となると予算会議で問題があった、鈴木君なんか一生懸命やっているので、毎年それに予算をくうし、十年かけても出来るかどうかからんと言うもんだから予算会議の空気は必ずしも良いとは言えなかった。

大学としては八〇〇万円しかとれないよということになった。これ以上は出せんよということにした。いや八〇〇万はお返しするということだった。出版は大変だ、新しい活字を使わねばならんで、大日本印刷ではイヤだと言う。小林君が印刷会社と交渉してうまくやってくれたので大助かりだったヨ。印刷も順調にいき、去年は七〇〇〇部刷った。この売上金は別会計にして印刷費を払い、のれば日中文化交流に全部使うことに決定している。カードを返してもらう時にも中国の郭沫若さんに対し、文化交流のために使うから返して欲しいと言ってある。従って、売上金は別会計にしてあり、去年はこの売上金を使って学生を中国旅行に出している。今回は売上剰余金をもって、中国地誌のうち欠本になっているもの、中国にはなくて日本にあるものを復刊して、それを寄付しようかという案も出ている。

稲川―この前の三十周年のお祝いの時、私学連盟の会長が開口一番、愛大は中日大辞典という立派なものを出しておられると挨拶していたですネー。

〔注〕滬友四一号（一九七八年一月）所載、「書院廃校・愛大創立当時の回想」の本間先生の談話。稲川は滬友会副会長稲川三郎氏。愛大創立三十周年記念式典に出席し祝辞を述べると共に、鈴木擇郎教授を通じて滬友会と愛大との関係改善を図った結果、一九七六年五月霞山ビルに於いて滬友会側田中香会長以下役員と本間先生との話し合いが実現した。